Review of Economics and Information Studies Vol.18 No.3•4 March 2018

芭蕉の文化経済学
Cultural Economics of Basyo

加　納　正　二

概　要

本稿では元禄時代において、文化と経済がどのように結びついていったかを松尾芭蕉のケースをもとに考察する。比較として井原西鶴についても言及する。

二人は俳諧師と浮世草子作家と異なる文筆業であるが、二人の根本には相通ずるものがあるように思われる。西鶴は意図的に銭金を強く前面に出し、芭蕉はその逆に意図的に銭金を奥へ引っ込めた。これは西行とイメージを重ね合わせる意図的な戦略であったとも考えられる。

二人はいずれも強く銭金を意識しながらポーズとして真逆な態度を示したように思える。

二人は文化活動を経済活動に結びつけた先駆者といえる。

二人が偉大な芸術家であり、偉大な作品を残したことには疑う余地がないが、同時に優れた起業家であったといえよう。

一　はじめに

北原進は『百万都市江戸の経済』の第五章で消費経済がもたらした文化として、季節の庶民行事（正月、花見、衣替え）、祭り、文字と絵、旅などをあげている。

消費経済は文化をもたらすが、文化が消費を活発にし、経済効果をもたらすとも考えられる。

芸術・文化は本来人々の娯楽であった。しかし、いつしか社会・経済システムの一環としてとりこまれていくようになった。我が国におけるその転換点の時期は元禄時代ではないかと考えられる。

文化的な財やサービスは公共財と私的財双方の性質を持つ準公共財であり混合財であり、外部効果を生み出す。このため市場の失敗によって最適な資源配分が実現されにくい。

効率的に実現されないため公共政策が必要と考えられる。

江戸時代に経済政策は存在しない。が、事後的にみて経済政策と同じ効果であった事柄はありうる。

尾藤正英は『江戸時代とは何か』の中で、職業文化人として松尾芭蕉、近松門左衛門、新井白石、契沖などを例にあげ、同書百五十九頁では、「彼らは社会人としての正道から外れても隠遁者にはならず、実社会の中でそれぞれに才能を生かす場所を見つけることができた。それは俳諧師や芸能の作者、あるいは学者として活動することが、職業として成

立する時代に生きていたからである」と述べている。

本稿では、文化人が行った行動を経済活動に結びつけて考えてゆきたい。

五代将軍徳川綱吉は神社・仏閣の大規模な工事を行った。綱吉が公共政策を意図したわけではなかろうが、実質的に今日でいう公共工事による経済政策を実施したことになり景気はよくなった。

しかし、幕府財政は大きな赤字となった。それを補てんするため、貨幣改鋳を行った。このためインフレが生じた。（元禄時代の政治経済の概略は拙稿「鶴姫の機会費用」を参照されたい）

都市生活の消費は元禄の好景気に煽られて高まり、文化生活も向上することになる。

消費の需要が高まれば供給も増える。江戸をはじめとする大都市（消費地）と生産地を結ぶ輸送ルートが開発されてゆく。陸では五街道、海では西廻り、東廻り海運。これらに乗って三都の文化が広まっていった。

商品の流通にともなう商人の動きだけではない。参勤交代、西国三十三カ所巡礼、伊勢参りなどの人の動きも文化を広めた。都市から地方へ、地方相互に。

俳諧という文化もしかり。量が増えれば、質の競争も起きる。芭蕉の登場は必然。登場すべく登場したといえよう。

本稿ではこの松尾芭蕉に焦点をあて、元禄時代に文化がどのように経済活動に結びついたか考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。

二章では文化と経済を結びつけて考察することの限界について述べる。

三章では松尾芭蕉の俳句と経済について考察し、四章は経済活動の観点から芭蕉と同時代の作家西鶴の共通点をさぐる。五章はむすびにあてられる。

二　芸術文化と経済を結びつけることの限界

法律と経済の学際的研究は多いに意義があるように思われる。例えば貧困問題である。経済学（財政学）では所得の再分配や社会保障費などについて議論される。具体的な生活保護費の支給などという場合には法律も必要になる。

社会科学は人類が作ったシステムを研究対象とするだけに社会科学相互の研究乗り入れは効果的に思われる。

しかし、芸術文化と経済を結びつけて学際的に考察する際には限界があるように思われる。

その一つの理由は、我々の中にある次のような潜在意識である。

すなわち、芸術文化は高邁で崇高な人間だけが行う活動であり、経済活動は人が糧を得るために行う活動である。

食べるために行う活動は人間でなくても動物でも行う。また効率的な生産活動を行うために「組織」を作ったり「機械」を使用したりするのは人類の特権というわけではない。獅子は集団で獲物を倒す。ただし牝のみ。牡は縄張りを守るための監視活動にあたる。一見昼寝をしているだけのようにも見えるが。これは企業で言えば、購買担当の役員とテイクオーバーに備える財務担当重役が分かれているようなものである。獅子は明らかに組織で動いている。蟻や蜂の例は持ちだすまでもない。

道具を使うのも同様。猿は棒を手に持ち、鴉は枝を口に咥え、道具として使用することを学習する。

だが、獅子や鴉が絵を描いた、彫刻をしたという話は寡聞にして知らない。

芸術文化活動は聖であり、経済活動は俗であり、両者には関連がないと信じたい気持ちが我々の心の奥底に少なからずある。

七十五歳の葛飾北斎は『富嶽百景』の版校を機に最後の改号を行った。「画狂老人卍」である。

初版巻末の跋文は有名である。

高齢になっても画業に対する情熱が盛んであることを示している。七十歳までに描いた作品は取るに足らないとし、七十三歳になってようやく鳥や獣、虫、魚などの骨格や草木がどうして生えてくるかなど分かったのであるから、八十六になればもっとわかるようになり、九十になれば奥義を極め、百になればそれらを超越した世界を知ることができるであろうとしている。

六十五歳以上が人口の四分の一を超える高齢化社会の現代、示唆に富み、高齢者は勇気づけられる言葉である。

北斎はそれなりの収入があったにもかかわらず、金銭のこだわりがないため常に貧乏であったとされる。

金銭に無頓着な画狂、これこそ我々が芸術家に求める姿なのである。

あくまでも我々は芸術家イコール芸術の求道者にしたいようである。

我々は、芸術文化人がお金のためではなく、純粋に芸術のために活動をしていることを暗黙のうちに期待している。

パール・バックは『大地』を書いたころを振り返って、「ひどくたくさんのお金が必要だった」と語ったとされる。（荒正人『大地』の「解説」六二七頁）パール・バックの長女は障害をもっていたからである。

しかしながらノーベル賞作家のノーベル賞受賞作の執筆動機が「ひどくたくさんのお金」であったとしても作品の質が下がるわけではない。

一方、モームについて小島信夫は『人間の絆』の「解説」（四八九頁）で次のように述べている。

「この金というのを、モームはほかの作家より欲しがった。金がなければ人間というの

はのびないと思った。モーム自身が金で苦労したり、芸術家志望者の中に金がないために挫折していくものがいるのをつぶさに見たからでもあろうが、それよりはむしろ、うまいものを飲んだり食ったり、女遊びしたり、外国へ行って珍しいものを見たり、といった欲望が強かったらしい。（中略）こういう心がけで小説など書けるか、という考え方が私達の中にあるかもしれないが、モームという人は、そういう考えの人がいるのを承知の上で、こうした俗なことをあえていうのである」

パール・バックとモームという二人の大作家は金銭を前面に出したようだが、パール・バックは悲劇の母として、モームは偽悪ぶる大作家として、その発言の意味を解説されている。

芸術文化人を我々は真の意味で金を欲しがる金の亡者、俗物にしたくないようだ。

第二に学際的研究という言葉は存在するものの、必ずしも越境が歓迎されているわけでもない。芸術文化の研究者はその芸術作品そのものを鑑賞し研究対象としたい。当然ながら作品のみならず作者にも考察が及ぶが、その場合の作者はあくまでも芸術文化活動にいそしんでいる瞬間の作者であり、経済活動を意識した作者ではない。

著名な芸術文化人はカリスマ性がある。彼あるいは彼女は高所得を得るために芸術文化活動を行っていたとは考えたくない。

これらから、「芸術文化」と「経済」とは考察の対象として結びつきにくいことになる。

三　芭蕉の俳句と経済

松尾芭蕉の生涯を生業の観点から外観してみよう。

俳諧研究者にとって松尾芭蕉は俳聖であり、生業とか所得などという俗なことは無視したい事柄かもしれないが、本章では生業の推移を考察する。

芭蕉は寛永二十一年（一六四四）伊賀国上野に松尾与左衛門の次男として生まれる。

伊賀上野生まれの芭蕉は次男であったため新七郎家へ武家奉公に出た。

藤堂藩伊賀付きの名家新七郎家の禄高は五千石。芭蕉は御台所御用人であったとされる。

寛文十二年（一六七二）二十九歳の春、江戸へ下向。

延宝五年（一六七七）三十四の春、万句興行を行い、宗匠として立机。

延宝五年から足掛け四年間、神田上水で一連の回収工事が行われたが、この工事に芭蕉が関与したとされている。

田中善信『芭蕉二つの顔』百四十一頁では、神田上水浚渫作業の業務を請負う仕事を最初に行った人として「人並み以上の処世の才に恵まれていたといわざるをえない」と記して、芭蕉の実業家の性質に言及している。

延宝八年（一六八〇）三十七の冬、深川の草庵（芭蕉庵）へ移住。

貞享元年（一六八四）八月、門人千里を伴い『野ざらし紀行』の旅に出立。芭蕉四十一歳。

元禄二年（一六八九）三月二十七日、曾良を伴い『おくの細道』の旅に出立。芭蕉四十六歳。

元禄七年（一六九四）十月十二日、申の刻に没。五十一歳。

定住の場所を持たない浮雲無住の境涯が芭蕉の理想であったろう。四十一歳から五十一歳没するまで芭蕉は晩年の半分を旅に過ごしている。

まさに俳諧の聖といわれるゆえんである。

しかし芭蕉が江戸へ下ったのは二十九歳。人生五十年と言われたこの時代ではすでに人生の再出発の時期としてはかなり遅い。

旅の詩人になるのは四十一歳からである。それまでの人生は、「処世の才に恵まれていた」といえるかもしれない。

井本農一は『芭蕉入門』四十七、四十八頁で次のように述べている。

「三十七歳の冬に、芭蕉は俳諧宗匠を止め、繁華街の日本橋小田原町の住居を引き払い、隅田川の川向うの深川に隠棲して、俳諧隠者となります。（中略）世間通俗の俳諧宗匠の生活を続けようとすれば、一応小市民的幸福はつかめるのです。それをわざわざ宗匠生活を捨てて、きびしい人生行路を選ぼうと決意したわけです」

芭蕉は俳聖、詩聖である。俳聖の求道的な、ストイックな生き方を示すエピソードとして有効である。

我々が一般に芸術家に対して期待するものと合致する。

芭蕉は、深川芭蕉庵に引っ越したのち、四十一で『野ざらし紀行』、四十四で『鹿島紀行』、四十六のときは『おくの細道』の旅にでかける。

井本農一は『芭蕉入門』九十八、九十九頁で次のように述べている。

「職業として、生活のために俳句を作り、門人を持つ俳諧師は当時たくさんいました。これに対して芭蕉は、生活のために俳句を作ることをやめ、俳句を作るために生活を整えようとしました」

井本は、これを「生活の芸術化」、「日常生活の俳諧化」という言葉で表現している。

まさに俳聖に相応しい生き方である。

だが、井本は九十九頁で「そうなると世間はかえって他の俳諧宗匠より芭蕉のような俳諧隠者の方を別格の一段上の芸術家として尊敬するよういなり、名声が上がり、質のいい門人がふえ、生活が安定してきました」と暮らし向きについても言及している。

これは西行などを真似た芭蕉の戦略ではないだろうか。

『おくのほそ道』には様々な箇所で文学上の虚構がみられる。文学作品である以上、当然の創作活動ともいえるが。『曾良旅日記』と照らし合わせると日付に相違があったり前後していたりする。

両作品を分析するならば、市振の遊女は架空とも考えられる。また芭蕉は、石の巻湊では宿を探して難渋したように描写されているが曾良の記述とは矛盾する部分があり虚構が含まれていると推測される。

これは「風雅を求める旅」であるとする芭蕉の芸術的演出が含まれており、単なる紀行文ではないからである。

『おくのほそ道』は百四十三日にわたる長旅であるが、金銭にかかわる記述は皆無である。

『曾良旅日記』には一部金銭の記述があるが、「置銭託壱〆弐七十文」と書いて消してあるような部分もある。

また『曾良旅日記』にしばしば登場する□や□を組み合わせた記号について金森敦子は「芭蕉に渡された金銭の可能性もある」と推測している。(『芭蕉はどんな旅をしたのか』四十六頁)

「短冊百枚　是餓ゑたる日の銭と代なす物か」と書簡で芭蕉は述べているように短冊に自作の句を書きつければ旅籠や路銀の代用にする自信が芭蕉にあったと同書四十九頁で金森は述べている。

芭蕉は、北斎のように金銭に無頓着だったのではなく、むしろ関心は高かったのではないか。だからこそ、けどられないように記録に残すことを嫌悪したのではないだろうか。

芭蕉は「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」と惟然に語った。

しかし、芭蕉ほど「生涯の道の草」に真剣になった人物は滅多にいないに違いないとして芥川龍之介は、これは芭蕉の「ポオズ」ではないかとしている。(芥川龍之介「芭蕉雑記」)

嵐山光三郎は『悪党芭蕉』の十二頁で、芭蕉には「時流にのる天才的直感がある」としている。その証左の一つとして「蛙合わせ」や蛤の句などと生類憐みの令との関係について言及している。

江戸時代に文化支援の公共政策はない。

文化人は自分でパトロンを探した。経済的支援者を見つけるのは近世においては芸術そのものの能力と並び必要な才覚であったと思われる。

芭蕉は杉風を筆頭に金銭を持つパトロンを大切にしたと思われる。

連句はチームワークである。メンバーに恵まれなければ、よい連句はできない。芭蕉は多くの優れた弟子に恵まれたからこそ素晴らし連句を残せたのである。

弟子に恵まれるためには、単に俳諧の能力だけではなく上に立つ人望が必要である。芭蕉はチームを統率しリーダーになる能力、経済的支援者を味方につける能力も備えていたと思われる。

芭蕉は料理人の経験もある。神田上水の請負は、初めての試みであり、ビジネスの先見の明があるといえよう。大勢の請負人を動かす必要もあったと思われる。芭蕉は様々な「才覚」に恵まれていた人物であろう。芥川龍之介や嵐山幸三郎の言葉に倣うならば「山師」なのである。

四　芭蕉と西鶴

表一に示されるように、芭蕉と西鶴は同じ時代に生きた。死亡時期も一年違いで場所は大坂である。

表一　芭蕉・西鶴比較年表

年号	西暦	芭蕉年齢	芭蕉事項	西鶴年齢	西鶴事項
寛永十九	一六四二			一	大坂で誕生
正保元	一六四四	一	伊賀上野で誕生	三	
延宝二	一六七五	三十二		三十四	妻病没、三人の子
延宝五	一六七七	三十四	万句興行、宗匠立机	三十六	
延宝八	一六八〇	三十七	深川芭蕉庵へ入る	三十九	矢数俳諧、四千句独吟
天和二	一六八二	三十九		四十一	好色一代男
貞享元	一六八四	四十一	「野ざらし紀行」の旅	四十三	好色一代男江戸版
貞享四	一六八八	四十四	「鹿島紀行」の旅	四十七	日本永代蔵 鶴字法度 生類憐みの令
元禄元	一六八八	四十五	「更科紀行」の旅	四十七	
元禄二	一六八九	四十六	「おくのほそ道」の旅	四十八	
元禄六	一六九三	五十		五十二	大坂で没
元禄七	一六九四	五十一	大坂で没		

西の西鶴、東の芭蕉。お互いに意識しないはずがない。江戸時代は今日のようにwebでたちどころに世界中の文化情報を収集できる時代ではない。とはいうものの、西鶴と芭蕉ほどの文人であれば、お互いをライバルとして意識していたと思われる。

「才覚」は西鶴が重視した貨幣謳歌の哲学にとって重要な概念であるが、俳聖芭蕉も実はその根底には同じものがあったのではないか。

これは芸術文化が趣味道楽ではなく、生活の糧を得るための生業に変化してゆく過程の一つとして必然的に生じた現象と考えられ、西鶴も芭蕉もリアリストであったのではないか、芭蕉の西行への憧れはポオズであったのではないか、と考えられる。

筆者には大福新長者教の『日本永代蔵』と芭蕉の『おくのほそ道』は表裏の関係にあるように思われる。

西鶴が銭金を強く主張する。その裏返しであるが、旅に生き隠棲する俳聖というのは、実は同じこととともいえる。

二人は、俳諧、浮世草子の世界で名をなす以前に他の職業で才能をみせている。

西鶴は大坂の町人で三十四歳のとき二十五の妻に先立たれ、その後は商売を手代にまかせたとされる。

児玉幸多は『元禄時代』四九一頁で、そのときの西鶴な放埒な暮らしぶりを記し「まことに気軽な身の上であった」としているが、若い妻を亡くし、子供は三人おり、その中の

一人の娘は盲目と言われている。（盲目の娘が実在したかどうかには諸説ある）

元禄五年に死んだ光含心照信女は、この盲目の娘という説もあるが、西鶴の後添えという説もある。

誓願寺日牌に「三月二十四日西鶴妻光含心照信女没」とあるのが、妻とみなす場合の根拠であろう。

朝井まかての小説『阿蘭陀西鶴』では、盲目の娘は「おあい」という名前で登場し、包丁も使い器用に台所仕事などもやってのける。「おあいの生きるこの世は、音と匂いと手触りでできていた」のである。

このことから鑑みるならば、決して西鶴は「気軽な身の上」ではない。妻を亡くし、幼い子供、そのうち一人は障害者、を残された西鶴はさぞや沈痛な心境であったろう。

その苦境から脱するのに役立ったのが浮世草子『好色一代男』を執筆することであったと思われる。西鶴は浮世草子を書くことで「憂き世」を「浮き世」に変え、精神的にも飛躍し、経済的にも成功したといえよう。

芭蕉も西鶴も二人は世捨て人ではなく、渡世の才覚をもっていたのである。

今日のように作家が職業人としての地位を確立した時代ではない。今日でも作家の収入は不安定であるし、また「詩人」で食べてゆくことはほぼ不可能とされている。

西鶴の矢数俳句は正確な数字の真偽はともかくとしても、西鶴のずばぬけた才能を示すものである。

武田麟太郎は「西鶴町人物雑感」三五三頁で「西鶴ほど金と人間の関係を究めて徹した作家は確かに世界に類がないのであろう」と述べている。

同書三五五頁で武田は次のような興味深い指摘をしている。

「西鶴は『日本永代蔵』『世間胸算用』『織留』の諸短編集では、金の一色に世界を染めあげつも、そこに心の動揺のあるのを隠すわけには行かなかった。（中略）仔細に見れ道徳や人間の執着、富と貧の問題、運命のことなどについても矛盾だらけの様子をみせている。もとよりこの矛盾だらけの点が彼の作品を何度読んでも新鮮な興味を感じさせ、どこに彼の本音があったかの容易に掴みきれない点が、人間に拘泥し、拘泥しぬいて結局は彼又迷っているところに、西鶴の大きさがあったのにちがいないのである」

五　むすびに

本稿では元禄時代において、文化と経済がどのように結びついていたかを芭蕉と西鶴を中心にして考察した。

筆者には芭蕉も西鶴も突出した能力を持つ起業家に思える。むろん芸術家としての稀有な才能は言うに及ばず。

二人は俳諧師と浮世草子作家と異なる文筆業であるが、二人の根本には相通ずるものがあるように思える。

西鶴は意図的に銭金を強く前面に出し、芭蕉はその逆に意図的に銭金を奥へ引っ込めた。これは西行とイメージを重ね合わせる意図的な戦略であったとも考えられる。

西鶴に盲目の娘がいたとすれば、やはり銭金を娘のために残したいと思うのは親心であろう。パール・バックの心境と同じである。

二人はいずれも強く銭金を意識しながらポオズとして真逆な態度を示したように思える。

二人は文化活動を経済活動に結びつけた先駆者といえる。

二人が偉大な芸術家であり、偉大な作品を残したことには疑う余地がないが、同時に優れた起業家であったといえよう。

芭蕉の死後、蕉風は人気を失い弟子たちは分裂したが、再び芭蕉崇拝が蘇る。

ドナルド・キーン著『百代の過客』五三九頁では次のように記されている。

「芭蕉の五十年忌を画した寛保三年（一七四三）になると、芭蕉の名声復興は、まさに最高潮に達してくる。俳人はこぞって日本の東北へ芭蕉の足跡を求め、芭蕉に記念碑が各所に打ち立てられる。以後彼の名声は、確固不動のものとなったのである」

こうして、かって芭蕉が西行を模倣したように、後の世になって（現代においてすら）多くの芭蕉信奉者を芭蕉と同じ陸奥の旅に向かわせたのである。（山崎北華もその一人である。山崎については拙稿「近世下級武士の文化経済と理想郷」を参照されたい）

旅の文化という経済効果も芭蕉は生み出したのである。

参 考 文 献

芥川龍之介（昭和四十三）「芭蕉雑記」「続芭蕉雑記」
『現代日本文学大系四十三、芥川龍之介集』所収、筑摩書房
朝井まかて（二〇一四）『阿蘭陀西鶴』講談社
朝日ジャーナル編（一九九六）『大江戸曼荼羅』朝日新聞社
阿部喜三男（昭和三十六）『松尾芭蕉』吉川弘文館
嵐山光三郎（二〇〇七）『悪党芭蕉』新潮社
荒正人「解説」（昭和四十六）パール・バック著、大久保康雄訳
『大地』所収、河出書房
池上惇他編（二〇〇五）『文化経済学』有斐閣
井本農一（二〇一五）『芭蕉入門』講談社学術文庫
井原西鶴著、村田穆校注（平成九）『新潮日本古典集成　日本永代蔵』新潮社
井原西鶴著、暉峻康隆他校注・訳（一九九九）『井原西鶴集一、二、三』小学館
大石慎三郎（一九七五）『元禄時代』岩波新書
大松騏一（二〇〇三）『神田上水工事と松尾芭蕉』東京文献センター
片山泰輔（二〇〇六）『アメリカの芸術文化政策』日本経済評論社
金森敦子（二〇〇〇）『芭蕉はどんな旅をしたのか』晶文社
金森敦子（二〇一三）『曾良旅日記を読む』法政大学出版会
加納正二（二〇一六）「近世下級武士の文化経済と理想郷」
Review of Economics and Information Studies, Vol.16, No.3,4
加納正二（二〇一七）「鶴姫の機会費用」
Review of Economics and Information Studies, Vol.18, No.1,2
北原進（平成二十六）『百万都市江戸の経済学』角川ソフィア文庫
鬼頭宏（二〇一五）『文明としての江戸システム』講談社学術文庫
岐阜県現代陶芸美術館（二〇一七）
『浦上父子コレクション展　引き継がれるコレクター魂』
曲亭馬琴（二〇一五）『近世物之本江戸作者部類』岩波文庫
桑田優（二〇〇一）『日本近世社会経済史』晃洋書房
小島信夫「解説」（昭和四十六）モーム著、大橋健三郎訳
『人間の絆』所収、河出書房
児玉幸多（二〇〇五）『日本の歴史十六　元禄時代』中公文庫
高尾一彦（一九九七）『近世の庶民文化』岩波書店
高橋亀吉（二〇一一）『日本近代経済形成史　第一巻』東洋経済
竹内誠編（一九九三）『日本の近世十四　文化の大衆化』中央公論社

ドナルド・キーン著、金関寿夫訳（二〇一三）『百代の過客』講談社学術文庫
後藤和子（二〇〇四）『芸術文化の公共政策』勁草書房
田中善信（二〇〇八）『芭蕉二つの顔』講談社学術文庫
武田麟太郎（昭和四十）「西鶴町人物雑感」暉峻康隆編『日本古典鑑賞講座十七　西鶴』所収、角川書店
中丸和伯（昭和四十四）『慶長見聞集』新人物往来社
西山松之助編（一九七八）『江戸町人の研究』吉川弘文館
西山松之助（昭和五十八）『近世文化の研究』吉川弘文館
尾藤正英（一九九三）『江戸時代とはなにか』岩波書店
富士正晴（一九九四）『奥の細道』学研
ボウモル・ボウエン著、池上淳・渡辺守章監訳（一九九四）『舞台芸術：芸術と経済のジレンマ』芸団協出版部
松枝茂夫編（一九九五）『中国名詩選　上』岩波文庫
松尾芭蕉著、穎原退蔵・尾形仂訳注（平成二〇）『おくのほそ道』角川ソフィア文庫
松尾芭蕉著、萩原恭男校注（二〇一五）『おくのほそ道』岩波文庫
松尾芭蕉著、角川書店編（平成一九）『おくのほそ道』角川ソフィア文庫
松尾芭蕉著、中村俊定注（二〇一六）『芭蕉紀行文集』岩波文庫
松尾芭蕉著、雲英末雄・佐藤勝明訳注（平成二六）『芭蕉全句集』角川ソフィア文庫
目崎徳衛（二〇〇八）『西行』吉川弘文館
山本健吉（二〇〇六）『奥の細道』世界文化社
横田冬彦（二〇〇九）『天下泰平』講談社学術文庫
脇田修（一九七八）『近世封建社会の経済構造』御茶の水書房
根木昭（二〇〇七）『芸術文化の振興と文化財の保護』放送大学教育振興会
三上隆三（2011）『円の誕生』講談社学術文庫